

俳句における原爆遺構

——水原秋櫻子の「聖廃墟」とその受容——

樫 本 由 貴

一、問題の所在

本稿は、俳句が原爆被害の様相を現物として場に留めるあるいは留めていた原爆遺構・浦上天主堂をどのように対象化し、人々がそのような俳句をどう受容してきたのかを明らかにする。

本稿ははじめに、俳人・水原秋櫻子自身の紀行文や句集発表当時の評価を整理・検討し、俳句における原爆遺構の対象化の過程と、秋櫻子の原爆表象に対する考えを探る。

次に、長崎の原爆をテーマにした俳句のアンソロジーや、俳句大会で詠まれた俳句から秋櫻子が浦上天主堂を指して用いた語彙「聖廃墟」を使用した句を抄出し、「聖廃墟」がどのように人々に受容され、また使用されていたのかを明らかにする。

これらの検討によつて「聖廃墟」の語彙イメージ、また俳句作品における浦上天主堂の表象の特徴を明らかにする。

長崎の原爆をテーマとした俳句のうち、浦上天主堂を対象とした俳句には、たびたび天主堂を指して「聖廃墟」という語が出現

する。この語の初出は、俳人・水原秋櫻子が一九五二年の八月に主宰誌『馬酔木』に掲載した連作「軽衣旅情」の中で発表した俳句と思われる。秋櫻子は、連作「軽衣旅情」の俳句を収録した句集『残鐘』（一九五二、竹頭社）刊行当時はすでに俳壇の有力者であった。秋櫻子は一九三〇年代から長崎のキリシタン文化や南蛮趣味に憧憬していたが、実際に長崎を訪問したのは長崎・浦上が被爆地となつてからだった。つまり秋櫻子は憧れのキリシタン文化を持つ土地・長崎と、被爆地・長崎を同時に訪れることになつたのである。

「聖廃墟」という語彙は、五七五の定型を持つ俳句において利便性が高い語である。書き手と読み手の間で、浦上天主堂Ⅱ「聖廃墟」であることが了解されていれば、浦上天主堂は九音であるのに対し、「聖廃墟」は五音であるから、余つた四音を別の描写に使うことができる。定型で書けば約一七音しか枠を持たない俳句にとつて、この差は大きい。「聖廃墟」はこうした利便性を加味して発想され、使用されたのであろうが、この時「浦上天主堂」は「聖廃

墟」、つまり聖なる廃墟とみなされている。これによって「浦上天主堂」という名詞がさす意味合いは多少なりとも変化する。秋櫻子の作り出した「聖廃墟」がどのように人々に受容され、波及したかをこのような問題意識から読み解くことは、俳句を書く／読む人々が原爆という文脈を負った言葉の受容にどのように向き合っているのかを明らかにする一助となるだろう。

二、水原秋櫻子の詠んだ浦上天主堂

二―一、「浦上天主堂」を取り巻く言説空間

隠れキリシタンが多く居住していた浦上地区では、江戸から明治時代にかけてキリシタンたちに対して「〇番崩れ」と呼称される弾圧が行われた。「浦上一番崩れ」は一七九〇年、「浦上四番崩れ」が一八六七年のことである。禁教令が解かれた明治以降も浦上地区には多くのキリスト教徒が住んでいた。

日本近代文学における南蛮趣味の誕生は明治末年頃からで、その代表作が北原白秋の『邪宗門』（一九〇九、易風社）である。大正期に入ると、芥川龍之介もキリスト教をモチーフとした多くの作品を残した^①。

秋櫻子は南蛮趣味に受けた影響を次のように述懐している。

私位の年輩の者の胸に、昔の切支丹に対する不思議な憧憬を植ゑ付けたものは、まづ第一に北原白秋氏の詩集「邪宗門」であらう。（中略）次にこの感激に拍車をかけたものは芥川龍

之介氏の切支丹を題材とした小説であらう。（中略）一時はその文章までを誦んじてゐたほどの熱心な読者であった。^②

秋櫻子は『東京日日新聞』に芥川の「邪宗門」の連載が始まった一九一八年に俳句を始めた。秋櫻子が俳句を始める以前に南蛮趣味に出会っていたことを確認できる。

浦上天主堂の献堂式は一九一四年に行われた。双塔の鐘楼を持つロマネスク様式の大聖堂は、当時東洋一の規模を誇った。

周知の通り、こうした南蛮趣味の対象としての長崎は一九四五年八月九日の原爆被害によって「被爆地」として眼差しを向けられることになる。当時、アメリカ軍は長崎を小倉に次ぐ第二の原爆投下地として定めていた。当日の視界不良によって小倉への原爆投下は回避されたものの、長崎上空にアメリカ軍が到着した際、雲が途切れたため、浦上地区に原爆が投下された。浦上地区の被爆被害は惨憺たるものであり、爆心地から一キロに満たない場所にあった浦上天主堂も全壊の被害を受けている。しかし、長崎市中心部を含めた浦上地域以外の被害は、山が爆風や熱線を軽減したため、比較的軽微であった。

前述したように、そもそもキリスト教徒の多い地域だった浦上地区は、その他の地域住民から差別を受けてきた。一九四五年以降はこれに加えて、被爆地としての差別を被るようになった。こうした苦しみを癒すために、キリスト教の影響が強い地であって、原爆被害を「受難」と言い換える言説が生まれる。それが自らも被爆したカトリックの永井隆による「浦上燔祭説」^③である。永井は、原爆とそれによる被害を「神の御摂理」とその試練であるとし、被

爆したカトリック信者たちは神に捧げられた存在として、選ばれたことにむしろ感謝すべきと説いた。この論に対しては、原爆を神の御摂理とすることで、アメリカの原爆投下の責任を免除し、被害者のカトリック信者たちの苦しみの訴えを封じてしまうものであると、山田かんや高橋眞司などから反論が成されている⁵⁾。

長崎・浦上の被爆被害をキリスト教表象と結び付ける言説や表現は浦上燔祭説だけではない。一九五〇年代、全壊した浦上天主堂の保存について議論が起る。結局、浦上天主堂は一九五九年に別の場所に再建され、聖像も移設される。畑中佳恵は、「被爆マリヤ」の像に焦点を当てた文学作品についてまとめている。畑中によれば、天主堂の再建と聖像の移設を背景にして、「マリヤ像の首を盗む話」が創作される。これらの作品は「遺構の存在意義が問われた状況に呼応し、「悲しみの聖母像」とダブる架空の首が乱暴なまでに必要とされるさまを描くことで、「長崎とマリヤ像が結んできた安定的な関係について再考を迫る、刺激的な光景」を展開した⁶⁾。

『句集 長崎』には被爆マリヤを表現した句がある。

浦上天主堂跡

カンナ炎え被爆聖母の貌ゆがむ

聖母かけ裸子がパン嘔るなり

裸遺児壊えし聖母に尿りをり

宿利杏花

撤去論が盛り上がる以前から、俳句においては浦上天主堂や被

爆マリヤの表現は試みられていたことが確認できる。

二二、「残鐘」という句集名

長崎の吟行句をまとめた連作「軽衣旅情」を収録した水原秋櫻子は句集『残鐘』巻末に次のように書き残している。

題名はいろいろ考へて見たが、「軽衣旅情」の中で詠んだ長崎の浦上天主堂が、つよい印象を頭に刻みつけてゐるので、「残鐘」と名付けることにした。「鐘楼落ち麦秋に鐘を残しける」といふ句からとつたのである。「遺鐘」といふ言葉もあるが、音読の感じを考へて「残鐘」に決めた。今までの句集名もすべて二字であつた。⁶⁾

表題句〈鐘楼落ち麦秋に鐘を残しける〉の「鐘楼」は被爆した浦上天主堂の鐘楼を指し、残されている「鐘」は鐘楼に取り付けられていたアンジェラスの鐘のことである。この句集は「軽衣旅情」を核とする句集であること、そして長崎での経験なしには句集も「軽衣旅情」という連作もあり得なかつたことが確認できる。

一方で、こうした秋櫻子の思惑は他の俳人にスムーズに伝達されたわけではなかつた。

「残鐘」は水原秋櫻子の近業である、昭和二十五年秋から二十七年秋までの二年間の作四百四十八句を収録した句集である。「中略」私は「残鐘」が出るといふ予告を見た時、よい名前だと思ふと同時に、秋櫻子も還暦を迎へたので、その心持を

こめてゐるのだな——と思つた、私も秋櫻子と同じ年齢なので、そんな感じが起つたのだらう、ところが「あとがき」を読んで違つてゐることがわかつたが然し残鐘がよいと思ふ心持には何か六十歳になつたから感ずるものがあつたのだ——とまた私は思つた。⁷⁾

青耶は「残鐘」から被爆遺構の浦上天主堂ではなく「残鐘」に「還曆を迎へた」「心持」を読み取る。それは句集を読んだ後でも変わらない。

そもそも「残鐘」、「残る鐘」は和歌の文脈で用いられた。『新編国歌大観』で確認すると、まず「鐘」単独では『拾遺和歌集』に〈山寺の入あひのかねのこゑごとけふもくれぬときくぞかなしき〉があり、『新古今和歌集』に前大僧正慈円の〈あか月の涙やそらにたぐらむ袖におちくるかねのおとかな〉がある。「残る鐘」は『洞院撰政家百首』⁸⁾に〈嵐ふくみ山の庵に夢さめて長き夜残る鐘のおとかな 道家〉、『落書露頭(群書類従本)』⁹⁾に〈初瀬山月は高根にかたぶきて風に残る鐘のこゑ〉がある。

秋櫻子が句集名の別案として挙げていた「遺鐘」は、南蛮文化の文脈で用いられ、おおむね南蛮寺の遺鐘を指して使用されている。国立国会図書館デジタルライブラリでは『考古界』(一九〇一・六、考古学会)に山縣昌藏の「南蠻寺の遺鐘」を確認できる。この南蛮寺の遺鐘には、新村出も『南蛮更紗』(一九二四、改造社)で解説を加えている。¹⁰⁾

北原や芥川の著作を熱心に読んでいた秋櫻子が新村のこうした著作に目を通していた可能性は高いだろう。一九三三年刊行の第三

句集『新樹』(交蘭社)には、南蛮文化への憧憬を高めた句作が収録されている。

長崎白蛇会よりおくられたる切支丹資料集を見てこれを作る

サンチアゴ病院の遺鐘 二句

玉ときし芭蕉と塔と目には見ゆ

この国の夜櫻に塔は聳えけむ

胴碑踏絵及び真鍮踏板

ぜすきりしと踏まれ踏まれて失せたまへり

踏板や邪宗門佛生るゝの図

南蛮船渡来図

紺青のあせたることの春の潮¹¹⁾

「長崎白蛇会」とは秋櫻子が指導していた長崎の句会である。秋櫻子は指導にあたり、長崎の人間が句材とする教会や鐘といったキリスト教関連の資料として写真集を送られた。これらの句はその写真集を見て詠んだ句である。¹²⁾

句集名が「遺鐘」であれば、少なくとも南蛮文化の文脈で長崎に関連深い句集だと読者に容易に伝えることができた。秋櫻子がそうしなかつたのは「音読の感じ」を考えた結果であるが、付け加えて指摘したいのは「遺鐘」が一九五二年当時の浦上天主堂の鐘を示す語として適切であつたかどうかという点である。南蛮寺の鐘を指して使用される「遺鐘」だが、南蛮寺の鐘は一九三〇年代時点で鐘として使用されていない。しかし、後述の秋櫻子の手記にも書

かかっているように、浦上天主堂の二つの鐘のうち破損を免れた方は被爆後も使用されている。ゆえに浦上天主堂の「鐘」を当時の時点で「遺鐘」と呼ぶことは難しい。「遺鐘」という語は、浦上天主堂の鐘を指す語として不適当なのである。

二二三、旅吟に配置される長崎・浦上詠

『残鐘』の中核をなし、浦上天主堂を詠んだ句を含む「軽衣旅情」は九州・四国への旅行を経て編まれた全一二六句の大作である。この旅行は当時不調だった秋櫻子のための慰安旅行⁽¹³⁾で、長崎・浦上のほかに雲仙、シーボルト宅跡、別府、松山、広島、岡山の和歌山の崎の湯などを巡っている。「関ヶ原」「安土」「道後温泉」「厳島」など、名所を差した前書きがあり、長崎のキリシタン文化、南蛮趣味を「名所」⁽¹⁴⁾に連なるものとして受容する様子が伺える。そのうち、長崎に到着後の句から抄出する。

二十三日、長崎市内見学。博物館にて 三句

マリヤ観音面輪愁ひて枇杷青し

樟若葉かゞやき壺の青磁澄む

ミケランジエ工作の聖像を模したりとつたふる踏松

古りしもの光放てり薔薇咲く日

浦上天主堂五句

麦秋の中なるが悲し聖廢墟

堂崩れ表秋の天藍たゞよふ

残る壁裂けて蒲公英の絮飛べる

天使像くだけて初夏の蝶群れをり
鐘楼落ち麦秋に鐘を残しける

長崎港の一隅

潮汚れ薄暑の除染群れて泊す

国際墓地

来雀を寢墓を見よと草なびく

途上

薔薇の坂にきくは浦上の鐘ならずや

崇福寺

荒れざまのあはれなるかな魚板の徽

芭蕉咲き豊かさねて堂立てり

大浦天主堂は修理完く成り、石階上に日本聖母像を仰

ぐ。階下に僧院あり、薔薇、罌粟など咲けるが見ゆ 三句

午後の日の暈に僧院は罌粟咲けり

僧院は廊欄古りぬ薔薇の上

薔薇喰ふ虫聖母見たまふ高きより

西にかたぶきし日影、色硝子を通して堂内にさし入りたり

五句

懺悔台初夏の外光黄なりけり

薄者の日五彩あやく壁にゆらぐ

聖祭壇明易き弥撒の燭のころ

燭さはに聖母の花のアマリリス

オルガンのみ据ゑわすれあり蛾のたちゆく⁽¹⁵⁾

秋櫻子は浦上天主堂や大浦天主堂以外の被爆遺構にも立ち寄つ

ているが、被爆被害を詠んでいる句は「浦上天主堂 五句」と前書きしてある句だけである。大浦天主堂も被爆被害を受けているが、修理が完成した後であり、原爆の被害を彷彿とさせるような描写はない。浦上天主堂の描写も「堂崩れ」など、原爆を直接表現する語彙が避けられていることが読み取れる。

二一四、俳句に詠める／詠めない「感動」と「聖廃墟」

秋櫻子はこの旅で出会った南蛮文化の品物を俳句に詠むことに抵抗はない。

住宅を改造したほどこから、無論大きくはないが、いかにもがつしりした建築で、二階の三間に、昔を偲ばせるものがある。ろ並べてあつた。私の俳句に詠みたいと思つてゐたマリヤ観音も、踏絵もあつた。マリヤ観音は支那で焼かれた白磁であるが、抱かれてゐるのがキリストで、その頭部は欠いてあるのださうである。これは当時の役人の眼をくらすためで、こゝに陳列されてゐるものも頭部はなく、その欠け口がいかにも無残な感じであつた。踏絵は数多くなかつたが、ミケランジェロ作の聖像を模したといふのが珍らしかつた。私はその場でマリヤ観音と踏絵の句を詠むことが出来た⁽¹⁶⁾。

「軽衣旅情」日記」は「軽衣旅情」の旅を振り返る日記形式の回想録である。長崎で南蛮文化の実物である踏絵や聖像を見、念願をかへた秋櫻子の感動は「邪宗門凶譜」を書いた時と類似してい

る。だが損壞した浦上天主堂での秋櫻子の様子は、これらとはやや異なる。

浦上天主堂のほとりで車を下り、小高い丘にあるその堂址に登つて行つた。私は二三月前にこの廃墟の写真を見てゐて、大体の想像がついてゐたが、もしその予備知識がなく、いきなりこれを見たら、もつと激しい感動を受けたであらう。こゝは原爆の中心地に近いから、堂は外壁の五分の一ほどを残して飛び去り、残壁には無数の裂け目が見えて危い上に、十余の天使像が悲しげなまなざしをして、訪ひ来る人を見おろしてゐるのであつた。

この廃墟をめぐるものはたゞ麦秋の畑のみである。背後には一連の丘陵があるが、それも大部分は黄と代赭とに彩られた麦畑である。そこから湧き出たものであらうか、無数の白蝶が堂後の空地に下りて来て、いつまでも立ち去らず飛びめぐつてゐるのが哀れであつた。

私は、こゝを詠むために、何の手がかりもないのに茫然とした。感動はありあまるほどなのだが、その感動を托すべき風物がないのである。残壁のあひだに見える空の青さなど、素晴らしいとは思ふのだが、それはあまりに広く大きくて掴みにくい。きのふは雲仙の道でアマリスを見て、こゝにその花があつたならばと空想もしたが、この大きな感動はとも、それに托すべくもない。私は堂後に建てられた仮小舎に立寄り、その窓辺に置かれた壺にアマリスを発見したけれど、それを詠みたいといふ気持は湧かなかつた。⁽¹⁷⁾

秋櫻子は損壊した浦上天主堂から受ける「感動を托すべき風物がない」ことに「茫然」とする。その上、この「感動」を受け止めたり、托したりするのに「アマリリス」では不可能だと述べている。当時の『馬酔木』に掲載された座談会「残鐘合評」で同人の桂樟蹊子が指摘するように⁽¹⁸⁾、大浦天主堂で「燭さはに聖母の花のアマリリス」と詠んでいることは対照的である。浦上天主堂で秋櫻子が受けた「感動」は、福岡（二〇一五）がベンヤミンの概念である「アウラ」を用いて説明する「戦跡」の「現物」や土地そのものが提示する唯一無二の真正さから受けたものと言ってよいであろう⁽¹⁹⁾。秋櫻子が「浦上天主堂 五句」を得るきっかけは、損壊した浦上天主堂との対峙ではなく、損壊を免れて本来の役割を果たす鐘の発見であった。

三十分ほど居たのちに、私達はこの丘を下つた。このとき白く塗られた木造の楼に鐘をさげてあるのを発見し、仮建築の会堂に行つて説明を求めると、爆撃によつて崩れた二鐘楼の鐘の、一つだけが破損を免かれたので、かうして仮の鐘楼を築き、いまま信徒に刻を知らせてゐるのだといふ。私は、これだけは詠み得ると思つたから、自動車に乗つても、なほその鐘楼をふり返つて眺めた。

麦秋の中なるが悲し聖廢墟
堂崩れ表秋の天藍たよふ
残る壁裂けて蒲公英の絮飛べる
天使像くだけて初夏の蝶群れをり

鐘楼落ち麦秋に鐘を残しける

この五句、どれも帰京した後に詠みあげた。⁽²⁰⁾

五句の内、「聖廢墟」の句を含む三句に使用されている季語「麦秋」を確認しておく。『図説俳句大歳時記』（一九六四、角川書店）では、この季語の例句に次のような句が挙げられている。

夕暮や野に声残る麦の秋

楚秋『五車反古』（二七八三）

麦の秋さびしき貌の狂女かな

蕪村『蕪村句集』（二七八四）

麦秋や遊行の棺通りけり

蕪村『新花摘』（二七九七）

週末の牧師旅にあり麦の秋

山口青邨『雪国』龍星閣（一九四二）

「麦秋」は梅雨を控えて農家が忙しく働く時期であるため、その本意は労働にある。しかし掲句の「さびしき」や「棺」といった言葉に見られるように、どこことなく寂寞の情感を滲える季語でもある。そして、山口青邨が秋櫻子の句に先んじて「牧師」と取り合わせていることにも注目できよう。「キリスト教」と季語「麦秋」の取り合わせには先例があり、取り合わせ自体が目を引きものではなかった。こうした点から、秋櫻子の句は季語の本意を損ねず、美しさに重きを置くものだったと言えそうである。

秋櫻子が損壊を免れた「鐘」をきっかけにして「浦上天主堂

五句」を作ったこと、それもその場での句作ではなく帰京後の作であったこと、句が美しさを帯びていることは切り離せない。

秋櫻子は関東大震災で被災しており、大量死の場に立ち会ったのは長崎が初めてではない。秋櫻子は関東大震災でも体験を俳句にすることはなかった。西村睦子（二〇〇九）は、その理由を秋櫻子が俳句は「自然の詩趣」を詠むものであり「現実にもがく人間」を描くものではないと考えていたからだと説明している⁽²¹⁾。この秋櫻子の考えは秋櫻子の師・高濱虚子の言葉に基づいている。

秋櫻子には自身が出来事の直接の当事者か当事者でないかは、俳句に出来る／出来ないに関係のないことだったと言えそうである。だが、隠れキリシタンの弾圧も浦上天主堂を始めとした被爆地も「現実にもがく人間」抜きには語れない出来事である。ではなぜ、秋櫻子はキリスト教弾圧の事実を示す品々を展示する博物館では即座に俳句を詠み、浦上天主堂では「帰京」という手続きなしには俳句を詠めなかったのか。

多くの命が犠牲になった被爆地や自然災害の被災地などを訪れる観光をダークツーリズム⁽²²⁾と呼ぶことがある。長崎の地で博物館や被爆地を巡った秋櫻子の旅はこの概念に近い旅だったと言えよう。秋櫻子の南蛮文化と被爆遺構の受容の違いについて、岡本亮輔の考察が手掛かりとなる。

上の議論を踏まえると、死の出来事との時間的空間的距離、娯楽性・商業性／教育性・反省性といった観点から、ダークツーリズムを腑分けすることができる。たとえば、先の例で言えば、衣川、本能寺、関ヶ原、壇ノ浦で起きた戦いは時間的

に遠すぎる。これらは、たしかに日本で起きた出来事だ。しかし、多くの人は、それらと21世紀を生きる自分たちとの間に連続性を感じとれないだろう。そこでいかに非業の死や大量死があったとしても、時間的距離の大きさがあるため、ダークツーリズムではなく、歴史ツーリズムとして体験されていると考えられる。⁽²³⁾

秋櫻子の見た博物館の展示品は、キリスト教弾圧によって多くの命が犠牲になった事実を示すことに間違いないものの、江戸から明治にかけての出来事であったために、一九五〇年代からは時間的距離が開いていた。ゆえに、秋櫻子はこれらの体験をダークツーリズムではなく歴史ツーリズムとして受容した。秋櫻子は弾圧の犠牲になった信徒たちとの連続性を感じていない。そのため「現実にもがく人間」がいたことは事実だが、所謂俳枕と呼ばれる名所と同じように俳句に詠むことができた。

一方で、秋櫻子は被爆遺構である浦上天主堂でアウラとも呼ばれる「大きな感動」を抱く。約二〇年前の出来事である原爆投下による惨禍は連続性を断ち切るには時間的距離が開いていなかった。その上、大浦天主堂のように修理もされていなかった浦上天主堂での体験は、彼の俳句に欠かせない要素である美しさや格調高さとは相反する「現実にもがく人間」を、真正性を伴って秋櫻子に示した。そのため、秋櫻子は浦上天主堂において俳句を詠むことができなかつたのではないか。

ただし本来の役割を果たし続ける「鐘」はこの論理から外れ、俳句の対象となっている。これはなぜか。秋櫻子は損壊を免れて「い

まも信徒に刻を知らせてゐる」「鐘」を中心に、人々が原爆以前／以後で変わらない営みを続けていると捉えている。この「鐘」と、寂寞の情感と人々がせわしく働く本意を持つ季語「麦秋」とを取り合わせることで、その出来事の以前／以後で大きく変容した「現実にもがく人間」との連続性を断ち、秋櫻子の句作に欠かせない美しさを付与できると考えたのではないか。

俳人・富安風生は、「聖魔墟」がこうした秋櫻子の美意識を凝縮した言葉だと評する。

それは作者の、格調の高い一流の句風といふことにも繋がるし、また句の柄合ひが純粹無雜で、混色を容れないといふことにも関係するのではないかと思ふ。強いて一口に言ふならば、申分のない豊かに快い句ひと潤ほひ、明るさ、美しさ——これが秋櫻子調を今日に代表する「残鐘」の、惱殺するやうな魅力となつてゐると思ふ。と同時にまたそれが一方で、どこかさういふ完成に反するレチスタンスの素ともなつてゐはしないかとおたしは思ふ。

〔中略〕（樞本注）『残鐘』から右の例に当てはまる句を並べている。その中に（麦秋の中なるが悲し聖魔墟）がある。

「聖魔墟」に見るロマンチズムとレアリズムとの妙にも美しい交錯と渾融。⁶²⁾

「ロマンチズムとレアリズムとの妙にも美しい交錯と渾融」という評が、秋櫻子の句作の特徴を端的に表している。「聖魔墟」という言葉は被爆遺構・浦上天主堂を端的に示して「レアリズム」を

保障しながらも、被爆遺構の文脈を可能な限り削ぎ落して「レアリズム」と「ロマンチズム」を融合させる。風生が「聖魔墟」に見出す「ロマンチズム」は、秋櫻子が俳句にしえた南蛮趣味、キリスト教モチーフのイメージを指すのであろう。原爆が「豊かに快い句ひと潤ほひ、明るさ、美しさ」と無縁の出来事であることは言うまでもない。しかし、秋櫻子の俳句に不可欠なこの要素を満たすために、浦上天主堂は「聖魔墟」と言い換えられた。「聖魔墟」は「現実にもがく人間」をそぎ落とし、キリスト教モチーフに重きを置いた「ロマンチズムとレアリズム」の「渾融」を示す語なのである。

三、詞華集における「聖魔墟」の使用

三―一、研究対象

本節では秋櫻子の「ロマンチズムとレアリズム」の「渾融」を含意する「聖魔墟」が、どのように人々に受容され表現されていったのかを、原爆俳句アンソロジーと平和祈念俳句大会における表現から明らかにする。研究対象は次の通り。

・句集長崎刊行委員会編『句集長崎』（一九五五、平和教育研究会事務局）

・長崎原爆忌俳句大会実行委員会編『句集長崎2』（一九八五、長崎原爆忌俳句大会実行委員会）

・長崎原爆忌平和祈念俳句大会実行委員会編『原爆俳句

1954-2020』（二〇二二、えぬ編集室）

『句集長崎』⁽²⁵⁾の掲載人数と句数は、稿者による調査で収録者は重複なしで六一二名、句数は二四三六句だった。投句者の名前間違いや、同じ部内で同一作者による句の二か所にわたる掲載（句の重複はなし）、居住地区の不統一など、不備が目立つ。刊行当時多くが売れ残り焼却処分された⁽²⁶⁾。

『句集長崎2』⁽²⁷⁾は第一回長崎原爆忌俳句大会から一九八五年大会の総記録を主とし、寄稿を中心に作家による連作・群作形式の句を含めたエッセイ、メモ、資料などが含まれた詞華集である。『句集長崎』の刊行や長崎原爆俳句大会でも中心的役割となった隈治人が発行者。巻頭の松尾敦之「火を継ぐ」はガリ版句集の完全再録で、ガリ版句集の完全復元は刊行当時、本書だけで確認できた。実物は『句集長崎』と比べ入手しやすい。

『原爆俳句 1954-2020』は二〇一九年に長崎市による「被爆75周年記念事業」の一環として作成された。長崎原爆忌平和記念俳句大会の全入選作品を掲載している⁽²⁸⁾。その他に年表、関係者の寄稿文も収録。「浦上」や「きのこ雲」といった原爆に関連し、句に頻出するキーワードの索引も収録してある。DVDも付録され、前述の『句集長崎』などのPDFデータも収録されている。

三二、「聖魔墟」あるいは「魔墟」を用いた句

次に示すのは、三つの資料から抄出した「聖魔墟」あるいは「魔墟」を含んだ句である。『原爆俳句 1954-2020』からは各俳句大会の入選作品などから抄出したため、句とともに大会情報を付す。『句集長崎2』には「聖魔墟」を用いる句がなかったため、「魔墟」を

用いている句を抄出した。

【資料1】『原爆俳句 1954-2020』より「聖魔墟」を用いた句

- ・一九五四年 第一回原爆忌平和記念俳句大会⁽²⁹⁾
聖魔墟裸子が攀つ隠れなし 小林康治
- ・一九五六年 第三回原水爆禁止世界大会記念俳句大会
聖魔墟仰げばまぶし大西日 梅原啄朗（長崎）
- ・一九五七年 第四回長崎忌平和記念俳句大会
聖魔墟ひまわり桶のごと咲かす 宮脇豊子（福岡）
子等と影伸ばし切る聖魔墟 矢上秋生（長崎）
- ・一九五七年 長崎俳人回原爆忌俳句大会⁽³⁰⁾
玉を解く芭蕉彼の日の聖魔墟 倉田青雞
- ・一九五八年 第五回長崎原爆忌俳句大会
己が影踏み炎天の聖魔墟 大庭ちかを（長崎）
- ・一九五八年 「原爆忌三十句（以前の作品の抄出）」より⁽³¹⁾
聖魔墟黒き揚羽の奇蹟めき 笹野博之
- ・一九八〇年 第二七回長崎原爆俳句大会
花鳥満つれどトルソーしぐれ聖魔墟 田村菊枝（長崎）
- ・一九八一年 第二八回長崎原爆忌俳句大会
紫蘇もめば死者染まりくる聖魔墟 田村菊枝
- ・一九八六年 第三三回長崎原爆忌俳句大会
灼け残るたたきに人型聖魔墟 田村菊枝
- ・二〇〇八年 第五五回長崎原爆忌平和記念俳句大会
夏雨に使徒の首墜つ聖魔墟 横山哲夫（長崎）
聖魔墟夏手套が通り過ぐ 横山哲夫（長崎）

【資料2】『句集長崎』より「聖廢墟」を用いた句

菊さげて黒衣の尼僧聖廢墟

長谷川史郊（広島）

穂芒に昼月あはし聖廢墟

長谷川史郊

邂逅や晩夏光濃き聖廢墟

山本素彦（大分）

蛇逃げてもとの静けさ聖廢墟

隅治人（長崎）

浦上天主堂

聖廢墟地下たび梅雨に跪座しをり

八反田宏（長崎）

長崎暑し裸灯のかこむ聖廢墟

小川峰翠（長崎）

【資料3】『句集長崎2』「寄稿作品」より「廢墟」を含んだ句

「おさなのき」

田村菊枝

手と樹皮を垂らし爆心の百日紅

無花果裂けて種子おそろしき被爆の木

万緑にどよもす怒り死魚朱し

紫陽花あかり爆碑に濡れる紙の鶴

たんぼぼは万燈廢墟の夕かわら

パンジーの爆発おさなき忌の碑銘

宵ぼたる沖へ沖へと見える核

夾竹桃語り部となる爆忌今日

原爆あるなマツチ一本の吾が火勢

丘はみどり爆死者眠るその日の鎧

「聖廢墟」は『句集長崎』と同じく原爆俳句アンソロジーとして出版された『句集広島』（一九五五、句集広島刊行会編）には見られ

ない。つまり、「聖廢墟」は長崎・浦上の原爆を句にするときの特徴語といえる⁽³²⁾。

【資料1】では、五九年〜七九年の二〇年間にわたって「聖廢墟」を用いた投句はない。「廢墟」についても同様で、第五回（五八年）に（己が影踏み炎天の聖廢墟）の投句が見られたのち、第二三回（七六年）の（忘れられる廢墟花一輪に原爆忌 石橋克介）まで見られない。この空白に浦上天主堂の撤去、再建、平和記念公園の平和像の建立が影響しているのかは関連する資料を見ることができなかった。【資料3】では、「聖廢墟」を用いた句はない。そのため、「廢墟」を詠みこんだ句を含む連作を抄出した。この連作の作者である田村菊枝は、【資料1】で確認できるように長崎忌平和記念大会で八〇年、八一年、八六年に投句している。ここで田村菊枝は「聖廢墟」を詠み込み、一貫した問題意識を見せている。

これらの句群から「聖廢墟」が説明不要な語かどうかを考えるとすることができる。例えば（菊さげて黒衣の尼僧聖廢墟 長谷川史郊）や（夏雨に使徒の首墜つ聖廢墟 横山哲夫）は「聖廢墟」に「黒衣の尼僧」「使徒」といった宗教的キーワードを重ねている。これにより「聖廢墟」が宗教的キーワードであるということを強調し、そのイメージを補強していると言える。だが、これらは句群の中では少数である。

そして「聖廢墟」が被爆遺構・浦上天主堂であると句中で説明されないものがほとんどである。むしろ「聖廢墟」によって何かを説明しようとする句がある。例えば（玉を解く芭蕉彼の日の聖廢墟 倉田青雉）における「彼の日」は「聖廢墟」によって説明される。この句の季語は「玉を解く芭蕉」だが、季節は初夏であり

八月を含まず、また時候の季語でもない。そのため「彼の日」の説明にはならない。「彼の日」を考える手がかりは「聖廃墟」にあり、「聖廃墟」が浦上天主堂であると了解している読者にとつては「彼の日」は八月九日と理解される。

さらに〈花鳥満つれどトルソーしぐれ聖廃墟 田村菊枝〉でも同様に「聖廃墟」は説明されず、他の部分の説明になっている。「花鳥満つれど」は句中の具体物「トルソー」の描写ではない。むしろ「トルソー」は「聖廃墟」がキリスト教モチーフであることによつて何のトルソーか補われている。「聖廃墟」が浦上天主堂であると理解した読者には破損した聖像だと読解されるのである。

例外として〈長崎暑し裸灯のかこむ聖廃墟 小川峰翠〉だけが「聖廃墟」が何かを特定するために「長崎」という地名を用いている。【資料1】から【資料3】を通してこの句だけが、長崎の平和俳句大会で発表されたという文脈を排して「聖廃墟」が何を指す言葉なのかを読者に示唆していると言えよう。

「聖廃墟」は浦上天主堂を示す語として、秋櫻子の作り出したイメージを頼りに受容されていることが分かる。

続いてその伝播を見ていく。次に挙げるのは「聖廃墟」と同じく長崎の被爆被害や被爆遺構としての浦上天主堂を読む時の特徴語と思われる「聖遺壁」を含んだ句である。長崎原爆平和記念大会の句より抄出した。

亡母は臉に被爆使徒立つ聖遺壁

聖遺壁万霊と蟻地より湧く

山中としお（第一五回・六八年）

葉騒消え陽の滴りの聖遺壁

空〇⁽³³⁾の背中が寒い聖遺壁

聖遺壁仰ぐ兵士のサンングラス

野川幸江（第三七回・九〇年）
木場田秀俊（第四二回・九五年）

坂口康二（第三〇回・八三年）

田尻吉三（第三三回・八六年）

野川幸江（第三七回・九〇年）

「聖遺壁」も「聖廃墟」と同様に、句の中で説明は付されない。〈聖遺壁万霊と蟻地より湧く〉（聖遺壁仰ぐ兵士のサンングラス）はなんの壁なのか、なぜ「残つて」いるのか、俳句からは分からない。「遺壁」であれば、城跡を説明する言葉として使用例があるが、『日本大百科全書』では「平和公園」の項目に旧浦上天主堂の説明語句として表れる。「聖遺壁」はその他に『馬酔木』（一九八八・四）の田中蘇水の連作作品のタイトルになっている。田中の連作自体は長崎の様子を詠むもので、蘇水は「馬酔木」の会員でもあり、この語は秋櫻子の「聖廃墟」から連想されたと言えるだろう。

三一三、「聖遺壁」の受容と伝播

こうした言葉の受容と伝播はさほど珍しくない。有名なのは中村草田男の〈万緑の中や吾子の歯生え初むる〉⁽³⁴⁾によつてそれまで季語でなかった「万緑」が伝播し、その後様々な俳人に用いられた例だ。「聖廃墟」の語の初出は今回調査しきれなかったが、少なくとも

も俳句における「聖廃墟」の使用は秋櫻子の（麦秋の中なるが悲し聖廃墟）が初めてと考えられる。秋櫻子の「聖廃墟」も「万緑」と同じように、もともと実力のある俳壇の有力者が名句を作り、それが人口に膾炙したために、名句を名句たらしめていると思われるキーワードが、その他大勢の俳人や俳句愛好家に使用されるようになったとみてよいだろう。

とはいえ「万緑」が季語として全国的に広まったのに対し、原爆遺構・浦上天堂を示す「聖廃墟」は使われる文脈が限られている。ゆえに、こうした伝播が成立するには、俳句以外の要素も欠かせなかった。その要素を整理する。

まず、長崎という場所である。長崎は秋櫻子が「白蛇会」を指導していたことも相まって、被爆前から秋櫻子の影響が強かった。

その影響は被爆後も引き継がれている。「残鐘雜記」に登場する下村ひろしは長崎馬酔木会の中心人物で、『句集長崎』の編集員でもある。『句集長崎』の制作の中心は「馬酔木」とは思想を異にする新俳句人連盟だったが、下村はその中でも馬酔木の人間として『句集長崎』の作成に積極的に関わっていた。また、平和記念俳句大会の選者には秋櫻子の高弟・石田波郷が名を連ねており、こうした大会や長崎の土地に根付いた句会では「馬酔木」系列の存在感が大きかった。秋櫻子調の美を端的に示す言葉である「聖廃墟」が受け入れられる地盤があったことが確認できよう。「馬酔木」や長崎で開かれる句会など、使用される場も整っていた。

このような背景でもって秋櫻子の認める美が強制的に句に挿入されることとなるが、次のような句はそこに連なりながらも、秋櫻子の美とずれていく。

聖廃墟裸子が攀ぶ隠れなし

小林康治

紫蘇もめば死者染まりくる聖廃墟

田村菊枝

灼け残るたたきに人型聖廃墟

田村菊枝

一句目、「裸子」という「現実にもがく人間」が直接的に描かれている。田村菊枝の句は「死者」や被爆によって残った「人型」を直接描写し、同じく秋櫻子調の「美」では排除されたモチーフを詠みこんでいる。

田村菊枝は、三一で示したように度々「聖廃墟」を用いた句を平和俳句大会に投句している。句を今一度確認する。

・一九八〇年 第二七回長崎原爆俳句大会

花鳥満つれどトルソーしぐれ聖廃墟

田村菊枝（長崎）

・一九八一年 第二八回長崎原爆忌俳句大会

紫蘇もめば死者染まりくる聖廃墟

田村菊枝

・一九八六年 第三三回長崎原爆忌俳句大会

灼け残るたたきに人型聖廃墟

田村菊枝

「おさなの忌」

田村菊枝

手と樹皮を垂らし爆心の百日紅

無花果裂けて種子おそろしき被爆の木

万緑にどよまず怒り死魚朱し

紫陽花あかり爆碑に濡れる紙の鶴

たんぼぼは万燈廃墟の夕かわら

パンジーの爆発おさなき忌の碑銘

宵ぼたる沖へ沖へと見える核

夾竹桃語り部となる爆忌今日

原爆あるなマツチ一本の吾が火勢

丘はみどり爆死者眠るその日の鎧

このうち〈花鳥満つれどトルソーしぐれ聖廃墟〉は「花鳥満つ」

「トルソーしぐれ」が秋櫻子調の美に連なるロマンチズムの要素であり、〈たんぼぼは万燈廃墟の夕かわら〉も「たんぼぼ」を「万燈」に見立てるところに同様の要素が見られる。田村菊枝が「聖廃墟」を継続的に読み続ける中で、「聖廃墟」を秋櫻子の作り出したイメージに寄りかかるとして使用したり、逆に相対化しようとしていたことは、注目すべきであろう。「聖廃墟」の語彙イメージが秋櫻子の句によって固められる中で、そうした表象に収まらない実作も試みられていた。

四、終わりに

本稿の目的は、俳句が原爆被害の様相を現物として場に留めるあるいは留めていた原爆遺構・浦上天主堂をどのように対象化し、人々はどのような俳句をどう受容してきたのかを明らかにすることであった。本稿の成果を確認する。

まず水原秋櫻子の句集や句作に関する資料を整理することにより、秋櫻子が重要視した美的感覚を確認した。そしてそれと相反する体験だった浦上天主堂の訪問を秋櫻子がどのように句作に落

とし込んだかを指摘した。秋櫻子が長崎を訪れた動機はキリシタン文化や南蛮文化への憧憬であり、浦上天主堂もこの延長線上に置かれていたが、浦上天主堂を訪れた秋桜子は、その場で即座に俳句を詠むことはできなかった。秋櫻子は、帰京によって時間的・空間的に浦上天主堂と距離を取ることで、天主堂を対象化することに成功し「浦上天主堂 五句」を作った。俳句に使用された浦上天主堂を言い換えた語彙「聖廃墟」は、発表当時秋櫻子の創作態度を反映した美的な到達点として評価された。

秋櫻子の美的感覚は句集名『残鐘』にも生かされた。本稿で指摘したように、『残鐘』という句集名は鐘本来の使われ方をしなくなった南蛮寺の「遺鐘」と、被爆被害を受けながらも鐘としての役割を果たし続けることになった浦上天主堂の鐘を意図せず区別した。代案の「遺鐘」が採用されていれば、浦上天主堂の鐘は当時も使われていたにもかかわらず、南蛮寺の鐘と同じようにもはや役目を終えたものとしての意味が付加されていたかもしれないし、キリシタン弾圧の歴史と原爆被害とが美しきという視点で関係づけられてしまったかもしれない。以上の点で『残鐘』は音感を超えた意義を有している。

一方で、秋櫻子は美的な到達を第一として「聖廃墟」を表象するとき、浦上天主堂と被爆の被害に苦しむ人々を切り離した。秋櫻子が永井隆の著作に目を通していた記録はない。しかし〈麦秋の中なるが悲し聖廃墟〉の句において原爆被害への感情を「悲し」という一言にまとめ上げ、「現実にもがく人間」を巧妙に隠して美を強調することは、「一種の明るさをもって被爆体験」を語り、被爆者は神に捧げられたのだとする「浦上燔祭説」への関連を感じさせ

る。

これらの危険性を指摘したうえで、詞華集の中で「聖廢墟」を用いた俳句を取り上げ、秋櫻子の作った語彙がどのように人々に受容されたかを調査した。本稿では、ほとんどの句が秋櫻子の語彙イメージを引き継いでいる中で、田村菊枝の句作が秋櫻子の「聖廢墟」の本意からずれた句作を行っていたことを発見した。田村菊枝は秋櫻子の作った語彙イメージを反復する句を作ってもいるが、「聖廢墟」のイメージ再考を図る句の発見は俳句における原爆表象において重要である。

本稿では踏み込むことができなかった問題として、俳句における「みなす」行為の倫理的な問題がある。秋櫻子が浦上天主堂を「聖廢墟」を言い換えたことは、浦上天主堂を聖なる廢墟とみなしたことと同義である。この言い換えが浦上天主堂と被爆の被害に苦しむ人々を切り離しているという問題点は、本稿で明らかにした。これは原爆表象の枠に留まる問題ではなく、むしろ俳句表象全体の問題として考えなければならない。

例えば、西山泊雲の〈傘さして水落し居る男かな〉⁽³⁵⁾は、書き手が傘をさす対象を「男」とみなしている。季語は「水落とし」つまり「落とし水」で、季節は秋である。秋の雨の降る中、傘を差した男が稲の生長に不要になった田の水を抜いている光景を描いている。掲句には装いやふるまいといった要素から男性とみなす力学が働いている。手法としては写生の句だが、この句は対象の性自認を置き去りにしており、書くという行為が孕む暴力性を読み取ることができる。他にも、東日本大震災に際して詠まれた照井翠の〈双子なら同じ死顔桃の花〉⁽³⁶⁾は、「双子なら」死に顔も「同じ」

であるとみなして、双子という属性を持つて生まれた死者の個別性をそぎ落とす。この句については青本袖紀が批判しているほか、その他の照井句には、関悦史が震災の直接の体験者ではない読者が照井の句が理解できてしまうものだという点で、震災表象を「スケールダウン」していると批評する⁽³⁷⁾。

秋櫻子の「聖廢墟」もまた、浦上天主堂を「聖なる廢墟」とみなすことで一句を成立させ、同時に被爆した人々を表現から切り離れた点で、同様の暴力性を孕んでいるということが出来る。こうした点は、とある語彙を一つだけ選出してその使用について足跡を追う本稿のような研究方法では十分に考察を深められなかった。浦上天主堂を表現する他の語彙も含めて調査することで、俳句がどのように原爆遺構を言い換え、みなしてきたのかを明らかに出来るだろう。「原爆乙女」や「原爆孤児」とカテゴライズされる被爆者の表象も同様である。

造語の音数と情報量が、造語の孕む問題を超えて受容され、ほとんど相対化されないまま今日に至っていることは、俳句が簡潔な言葉、特に名詞によつて対象を客体化する文芸であることの問題点を浮かび上がらせた。本稿では「聖廢墟」に注目したが、このような社会的文脈に負うところの多い俳句について、引き続き詞華集の中で集団的に使用される言葉の発生に立ち返った俳句の読解を行いたい。

稿中の「前略」「中略」は全て樫本による。また、稿中の俳句の引用は（ ）を使用した。

注

8 一三三二年成立。

1 畑中佳恵「近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」」『文献探究』(二〇〇三・三、文献探究の会、一・二三頁)は南蛮趣味が

9 今川了俊著。一四一二年頃成立。群書類従本による。

生まれた同時代の言説を整理し、「明治四〇年以前の「外国一般」あるいは「南蛮鉄の硬さ」と関わるようなイメージの振幅は、以後の南蛮趣味において「ポルトガル・スペイン・イタリアとその植民地であった南洋の地域」という幅へと淘汰されることが予想される。この「南蛮」

10 新村出「切支丹宗の遺物」『南蛮更紗』(一九二四、改造社、四二・四三頁)

11 水原秋櫻子「邪宗門図譜」『新樹』(一九三三、交蘭社、一七・二〇頁)

一語と対応して立ち上がるイメージの幅の中に、当時、主に人類学を通して関心が寄せられていた、ニューギニアに代表される南の野蛮な地への志向と、それを支配する側である西洋・近代への志向が同居していることは、とても興味深いことではないだろうか。つまり、北原白秋らがキーワードとしたのは、「未開／先進の二項対立のいずれか」という形での所属が不明瞭な「南蛮」であった、と言えそうである。」(八頁)と整理する。

12 水原秋櫻子「残鐘雜記」『馬酔木』(一九五三・三、五一頁)
私が長崎へ行つて句を詠みたいといふのは、「新樹」時代からの念願であつた。あの句集には「邪宗門図譜」といふ一聯の作があるが、常時長崎医大に白蛇会といふ句会があつて、その句稿を見てみたよめに、私は切支丹関係の写真集をもらひ、それを材料として詠んで見たのである。それ以後長崎のことが頭をはなれず、写真や絵や物語で見たり想像したりする結果が、自分だけの長崎風景をあれこれと創作してしまひ、句を詠むならどういふ構図をとり、どういふ色彩を配合しようかといふことまでも考へるやうになつた。

2 水原秋櫻子『俳句になる風景』(一九三五、交蘭社、一四五・一四八頁)

3 命名は高橋真司による。

4 四條知恵『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』(二〇一五、未來社)、福岡良明『被爆の語りとカトリシズム』『焦土の記憶——沖繩・広島・長崎に映る戦後』(二〇一一、新曜社)

13 水原秋櫻子「残鐘雜記」『馬酔木』(一九五三・三、五一頁)
「木倉王滝」もそれで、失敗にちかひ出来だど考へると、その落胆があとの作にもひびいて、去年の春まではわれながら調子がわるかつた。そんなときに、竹頭社版の悌二郎君の「風雪前」が出来た。いゝ句集だと思つた。「中略」そのうちに九州・四国への旅行の話がもちあがつたが、これは殆ど私の知らぬうちに波郷君や、悌二郎君が御膳立てをしてくれたので、たゞ私は日をきめて身体だけ持つて行けばよいといふ好条件に恵まれたのであつた。

5 畑中佳恵「被爆マリア」川口隆行編『原爆』を讀む文化事典』(二〇一七、青弓社、二八〇頁)

6 水原秋櫻子「巻末に」『残鐘』(一九五二、竹頭社)、所収『増補版現代俳句体系 第九卷』(一九八〇、角川書店、二五六頁)

7 山口青邨「残鐘」鑑賞ノート』『馬酔木』(一九五三・三)一七頁

14 古典で詠まれてきた名所・旧跡のことであり、松尾芭蕉が『奥の細道』で歩いた東北が代表だが、その性質上歌枕と重なるところも多い。

15 水原秋櫻子「軽衣旅情」「馬酔木」(一九五二・八、九、一一頁)

より長崎到着後の句から二二句を抄出した。

16 水原秋櫻子「軽衣旅情」日記『十二橋の紫陽花』(一九五四、読

売新聞社、二〇頁)

17 「軽衣旅情」日記『十二橋の紫陽花』(一九五四、読売新聞社、

二一、二二頁)

18 篠田悌二郎、佐野まもる、桂樟蹊子、相馬遷子、小島昌勝、澤田

幻詩朗、能村登四郎「残鐘合評」「馬酔木」(一九五三・三)に「浦

上の廢墟に対して、大浦天主堂は「修理完く成り」とせられてある。

先生のお気持は落ち着いているのであらう。先生は思ふ存分、対象に

立向ひかつ切り込んでゐられる感がある。この「燭さはに」のお作な

ど特にその感が大きい。」とある。

19 福岡良明『「戦跡」の戦後史——せめぎあう遺構とモニュメント』

二〇一五、岩波現代全書。

20 「軽衣旅情」日記『十二橋の紫陽花』(一九五四、読売新聞社、

二二頁)

21 西村睦子『「正月」のない歳時記—虚子が作つた近代季語の枠組み』

(二〇〇九、本阿弥書店、三一—四頁)

震災後刊行された「ホトトギス」10月号はいつもの通り8月24、25

日締切の句だけで、見開きと消息欄に虚子の文が載るだけである。

(中略)

新題を積極的に採り入れ、実際に客観写生して詠むように推進し、

誌友に被災者も多く、千載一遇で体験したことでも、震災は俳句で詠

む対象ではないと極めて冷淡に扱った。ここには虚子の俳句観がはつき

り示されている。つまり俳句は自然の詩趣を詠むものであって、現実に

もがく人間を描くものではない。そして、かかる場合は写生文こそ

威力を発揮するとして、11月号で数編の震災体験記を載せているが、

句は全く載せていない。子を背負い火で顔が熱くなるような中を逃げ

た秋櫻子でさえ一句も出詠していない。この4年後の昭和9年には花

鳥諷詠を唱え、詠む対象は花鳥諷詠、詠み方は客観写生と俳句を定

義した。俳句は遊芸であり極楽の文学なのである。

22 「ダークツーリズム」は「日本大百科全書」に「大規模災害の被災

地、戦争の激戦地など多くの人が犠牲になつた場所を訪ねる、観光の

一ジャンル。娯楽を目的とした通常のツーリズムと区別した呼称であ

る。「ブラックツーリズム」black tourism、「悲しみのツーリズム」sad

tourism などともよばれる。(中略)ダークツーリズムの基本的な目的

は、その悲惨さを後世に伝えていくために関連施設を保存すること(保

全目的)や、現地を訪れることで災害や戦争の悲惨さを追体験するこ

と(学習目的)にある。」とある。

23 岡本亮輔「ダークツーリズムから見る聖地巡礼——カトリックの聖

遺物と主観の真正性——」『立命館大学人文科学研究所紀要』(二〇

一六・三、立命館大学人文科学研究所、六七—六八頁)

24 富安風生「残鐘雑感」「馬酔木」(一九五三・三、一—四頁)

25 現在は国立国会図書館デジタルコレクション、『日本の原爆記録⑧

原爆歌集・句集長崎編』(二六)、『原爆俳句 1954-2020』の三(で確

認できる。本稿では『原爆俳句 1954-2020』のデータを調査に用いた。

26 早川雅之解説「凝縮した訴えの重さ」『日本の原爆記録⑧ 原爆歌

集・句集長崎編』(一九九一、日本図書センター、四五—九頁)

27 現在は国立国会図書館のデジタルコレクションにおいて確認可能なほ

か『日本の原爆記録⑧ 原爆歌集・句集長崎編』(ただし、第二部、

第三部のみの抄録。、『原爆俳句 1954-2020』にデジタルデータとして全編収録されている。本稿では『原爆俳句 1954-2020』のデータを調査に用いた。

28 ただし、第一回から第一五回までの入選作品は作品集が入手できず、『句集長崎2』に収録されたために依った資料。「データベースについて

の説明」より。その他に年表、関係者の寄稿文も収録。

29 長崎原爆忌を追悼する平和記念俳句と後援の会。

30 第四回長崎忌平和記念俳句大会とは別に、同年八月一日に催された大会。

31 隈治人「矛盾の論理を破ろう 第13回原爆忌を迎えて」

32 なお、対象をキリスト教関連の言葉とすると「聖母」「聖鐘」などが『句集広島』に見られる。

33 データベースには「？」とある。判別不能。

34 『火の島』（一九三九、龍星閣）

35 『泊雲句集』（一九三四、巧芸社）

36 『龍宮』（二〇一三、角川書店）

37 青本袖紀「顔のない双子」（二〇一八・一一・八、<https://note.com/naminomator/n27e47eb9b0c> 二〇二一年二月八日閲覧）、関悦

史「俳句形式の胸で泣く 照井翠句集『龍宮』を読む」（『週刊俳句』

二〇二一・一一・一六、[https://weekly-haiku.blogspot.com/2012/12/blog-](https://weekly-haiku.blogspot.com/2012/12/blog-post_4940.html)

[post_4940.html](https://weekly-haiku.blogspot.com/2012/12/blog-post_4940.html) 二〇二一年二月八日閲覧）